

## 1 研究主題について

### (1)研究主題

「自ら進んで学び合う生徒の育成」

～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習活動の工夫を通して～

### (2)主題設定の理由

本実践の対象となる第3学年への教科アンケートの結果（平成30年5月実施）において、「よくある」と答えた生徒が特に少なかった質問は、

- ・自分の考えを積極的に仲間に話していますか（14%）
- ・「ここは〇〇のように表現したい」と考えたことを、実際に歌って表現する方法を知っていますか（19%）

であった。

昨年度の研究の成果から、歌詞に注目し、歌詞の内容と音楽を形づくっている要素や要素同士の働きをかかわらせて曲想を味わっている生徒が多い。一方で、自分の考えを積極的に仲間に伝えることに弱さが見られる。また、機械的な技能の習得に止まりがちで、「こんな風に歌いたいから、こんな技能が必要」という思考・判断を表現に結びつけることにも弱さが見られる。

また、新学習指導要領では、「音楽的な見方・考え方を働かせ」と表記され、音楽科学習における深い学びが実現するためには、「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習活動が必然である。また、自分自身の「音楽的な見方・考え方」をより豊かなものにしていくことが生涯にわたって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わっていく際に大切になることが示されている。

つまり、生徒が主体的に感性に照らして音や音楽を捉え、表現への思いや意図をもち、仲間と対話しながらより豊かな表現をつくり出していけるように指導にあたることが重要である。こうした活動を通して、自ら進んで学び合う力を高めていきたいと考え、本主題を設定した。

### (3)目指す生徒の姿

研究の対象となる生徒は、3年間担当している学年である。本研究における目指す生徒の姿を次のように捉えた。

- ・表現された音楽に根拠をもつて的確に評価し、仲間と対話的に試行錯誤しながら、よりよい表現を主体的に見出すことができる生徒
- ・音楽の多様性を捉え、音楽のよさや美しさを感じ取ったり、習得した知識及び技能を活用して、思いや意図を表現したりすることができる生徒

## 2 研究内容について

### (1)研究仮説

①「題材指導の工夫」や②「単位時間の役割の工夫」をすれば、目指す生徒の姿を具現することができる。

### (2)研究内容(視点)

- ① 題材指導の工夫
- ② 単位時間の役割の工夫

### (3)研究の具体的方途

- ① 題材指導の工夫
  - ア) 学びの流れを明確にした題材構想図の工夫
  - イ) 単位時間の追求への見通しの工夫
- ② 単位時間の役割の工夫
  - ア) 主体的に追求に向かうための導入の工夫
  - イ) 対話的に学び合う場の設定と相互評価の工夫

### 3 実践事例

(1)実践 3年生 題材名「曲の構成と表現」 『Let It Go～ありのままで～』『青い鳥』

#### ① 題材指導の工夫

##### ア) 学びの流れを明確にした題材構想図の工夫

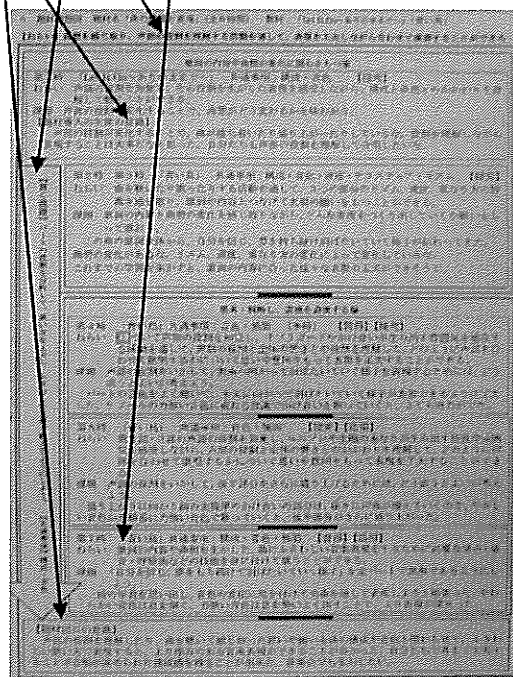
題材の見通しと、終末の姿の具現化を明確にするために、生徒の思考の連続性を意図的に生み出す題材構想図の工夫が必要であると考えた。

そこで、題材構想図を作成する上で、以下の3点を題材構想図の中に位置付けた。

題材構想図の作成における工夫（鑑賞・歌唱）

- ①「題材のねらい」の明確化と「題材を貫く課題」の設定
- ②題材学習前と学習後の「生徒の意識」の位置づけ
- ③題材を通して生徒が習得した技能を活用する「題材の中核となる授業」の設定

- i) 「題材を貫く課題」を設定することで、題材の見通しをもたせると共に、毎時間題材を貫く課題に立ち返り、単位時間に学習している内容が最終的に「題材を貫く課題」の解決に必要であることを意識させた。
- ii) 題材学習前の生徒の意識や姿、また題材学習後に目指す生徒の意識や姿を明確にし、題材構想図に位置付けた。この位置付けにより、題材を学習することで生徒の意識や考えの変容を明らかにすることを意図とした。本題材を学び終わった時に目指す生徒の意識や姿を明確にしておくことで、常に最終的な姿をイメージして指導にあたることができた。
- iii) 題材のねらいに到達するために、最もねらいに迫る授業として、「題材の中核となる授業」を位置付けた。題材の学習で学んできた見方・考え方を活用して、さらに音楽の多様性を捉え、音楽のよさや美しさを感じ取ることができる場として位置付けた。



##### イ) 単位時間の追求への見通しの工夫

歌唱教材『青い鳥』では、授業の始めから終わりまでのゴールが生徒に明確に分かるよう、小集団で活動をする前に全体で共有する場を設定し、単位時間の見通しがもてるポイントを示したり、中間交流では、抽出グループを取り上げて、「こういう会話していこう」「こういうやり取りを今日して欲しいな」と方向性を示したりした。

##### i) 全体で共有する場の設定

- ・前時、「もっと *f* にしたいけれど息が苦しい」という声が聞こえた。そこで、「今、自分の息ってどうなってるかな？」と問いかけ、課題に対する自分の学習状況を評価させた。旋律の音の動きが高くなるにつれて、息を吐くスピードを速くしたり、細くしたりすることを全体で共有し、息を使って歌うことを体感した。「じゃあ、他の場所でもそれを使ってできないかな？」と問い、目的意識を持たせて小集団の活動に取り組むことができた。
- ・声部の役割を生かして表現を工夫する授業では、小集団に分散する前に既習学習である「主旋律」「副次的な旋律」を確認し、楽譜を手掛かりに声部の役割を全体で分析した。全体で共有する場を設けたことにより、小集団の活動でも楽譜を根拠にしながら表現を追求する姿が見られた。

##### ii) ポイントの提示

これまでは、ポイントを示さずに小集団での活動を行っていた。そのため、〇〇を盛り上げるために練習することは分かるが、ただひたすらグループやパートで歌うだけの活動になってしまい、どうして盛り上げることができたのか、初めと終わりの変容はあるの

に根拠が曖昧なまま終わってしまっていた。そこで、生徒が自分たちだけでも活用できるポイントを示した。

## I 体の使い方

I 「この部分を盛り上げるために、この中から、自分はこれを使うと盛り上げれるなど思うのを掴んできて！」

- ①言葉の発音（はっきり・やわらかく・強調など）
- ②息の使い方（細く・太く・スピードなど）
- ③体（だんだん前のめり・膝を使うなど）

## II 技の使い方

II 「声部の役割を生かして未来へ向かって羽ばたいていく様子を表現するために、これを使うと役割が生かせるなど思うのを掴んできて！」

- ①声量のバランス・強弱（全パート同じ声量で良い？）
- ②音色（主旋律はどんな音色で歌う？副旋律は？）
- ③聴き合い（どのパートの声を聴きながら歌う？）

音楽的な要素をポイントにしたことによって、音で試行錯誤する時間も多くなり、自分に合った方法を見つけることができた。また、一単位時間の見通しがもてたことで、出口で目指したい姿が生徒自身にも明確になり、個人にとっても集団にとっても高まりが自覚できた。

## ② 単位時間の役割の工夫

### ア) 主体的に追求に向かうための導入の工夫

生徒が表現へのあこがれや、「どうしたら〇〇なようになるのか。」と思える強い課題意識をもてば、自ら進んで学び合う意欲が持続すると考えた。そのために、導入での魅力的な示範の提示を心がけた。

#### i) 比較

- ・声部のバランスが悪い音源と、声部の役割を生かして演奏されている音源を聴き比べることで、どんな表現に高めたいのか、また生徒の声部の役割への意識化が促進された。
- ・平板で喉に力が入った「胸声」と、響のある「頭声発声」を示し、違いを区別するとともに、どちらの発声を目指したいのか、自己決定・自己判断する場を設けたことで、必然のある課題にもつながった。

#### ii) 感動や驚きを起こさせる

- ・CDの範唱ではなく、男性職員にも手伝ってもらい、本物の歌声で示範演奏した。
- ・ゴミ袋とリコーダーを使い、腹式呼吸を視覚的に示した。

### イ) 対話的に学び合う場の設定と相互評価の工夫

#### i) 対話的に学び合う場の設定

単位時間の学習活動の中心はパート練習またはグループ練習である。仲間と音楽表現を創意工夫する力や音楽表現の技能を身に付けられる活動を位置付けた。パートリーダーやグループリーダーには毎時間、練習の目的を確認し、目的を達成するための練習方法を助言した。既習内容を活用して、どのように歌ったら音楽を形づくっている要素の働きに合うのか話し合ったり、実際に試行錯誤して歌ってみたりして、こうしようと思ったことを拡大楽譜に書き込みながら活動した。また、前時までの学習を足跡として掲示することによって、学びの手掛かりとなるような環境設定を行った。このように自分たちが目指す表現のイメージを言葉や線で視覚化することで、互いの思いや意図を楽譜を指しながら伝え合えるようにしたり、パート全員が共有した音楽表現に向かって追求できるようにしたりするなど、生徒が思考しながら表現を工夫し

ていけるように学習活動の形態を工夫した。

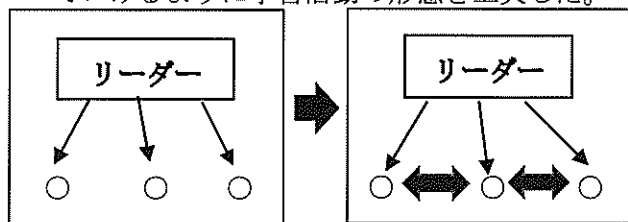


図1「以前までの隊形」

図2「現在の隊形」

以前までは、パートリーダーやグループリーダーが中心となり、パートメンバーやグループメンバーに対して、1対1の交流を行っていた。しかし、これでは1人ひとりの考えが広がる姿があまり見られず、自ら進んで学び合う生徒を育成できなかったという課題が残った。そこで、パートメンバーや

グループメンバー同士の横関係を大切にした。横関係のつながりを大切にしたことによって、パートメンバーやグループメンバー相互の交流が生まれた。その結果、仲間との学び合いの中で、「なるほど。」と思ったり、「私は優しく歌いたいと思っていたけれど、前に向かって進んでいくようにだんだん強くして歌う考えも良いと思った。」と、自分の意見との違いを認識したりすることで、考えを深めることができた。

#### ii) 相互評価の工夫

本実践の対象となる第3学年への教科アンケートの結果（平成30年5月実施）から、終末のまとめについて、自分の言葉で書こうとする生徒が多かった。（95%）自分自身の学び方の変容を知ることが、充実した学習活動へつながり、充実した学習活動の中でこそ、自分の考えの高まりにつながると考える。さらに、「できた」「分かった」が学習活動の中で生徒同士で言い合えるよう、相互評価の工夫を試みた。

歌唱教材『青い鳥』では、小集団の活動で、歌うごとに「今のはどうだった?」「さっきの歌い方と比べるとどう?」と隣の人と話して交流するだけではなく、お互いに聴き合ったり、実際にお腹を触り合ったりする活動を取り入れた。「今、やわらかい音色を歌っていたときはお腹があまり動いていなかったのに、力強い音色のときはお腹がフツてへこんで勢いよく動いたよ。分かった、そうやって動かせば良いのか!」と、課題を意識した評価を生徒同士で行うことができた。

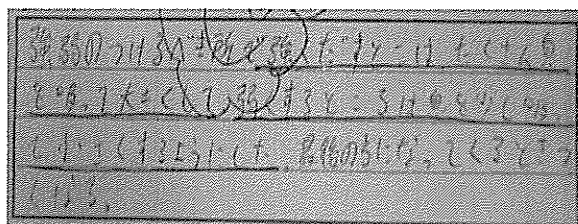


図3「生徒Aの振り返りプリント」

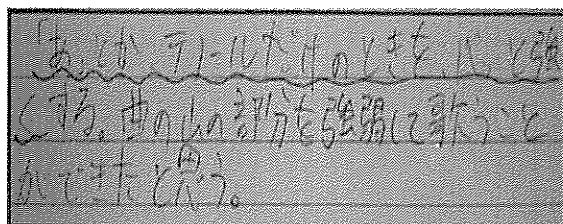


図4「生徒Bの振り返りプリント」

## 4 成果と課題

### 《成果》

- 毎時間の役割を明確にした題材構想図と題材を貫く課題を作成することは、単位時間の授業に繋がりをもち、学ぶ必然のある授業作りに有効であった。
- 全体で共有する場、追求の見通しとなるポイントの提示、また導入の工夫をしたことで、主体的に学ぶための教師の出る場や価値付けの重要性を学ぶことができた。
- 小集団活動において、昨年度の研究から、男声パートの練習は、人数が多いため、女声パートのようにスムーズに交流ができないときがある。混声3部の場合は、男声を2つのグループに分けて練習するなど、練習方法を改善していく必要があり、パート練習のより良い方法を追求していきたいという課題があった。リーダーとメンバーの縦関係ではなく、メンバー同士の横関係のつながりを大切にすることで、仲間の学びの良さを取り入れて自分の学びへとすることができたり、対話が増えたりして表現の深まりに向けて追求し合うことができるようになってきた。

### 《課題》

- △小集団での活動において、相互評価の工夫を取り入れたが、アドバイスをし合うことに止まるだけでなく、「〇〇なふうにお腹を意識して歌ってみるから、私の歌を聴いて欲しい」という、さらに自ら進んで学び合う生徒の育成を目指したい。